

スポーツ系サークルにおけるリーダーシップ研究

An effective leadership style of the college circle

1K09A238

山本 遼

指導教員 主査 作野誠一 先生

副査 正木宏明 先生

【目的】

大学生活において大多数の学生は、サークルに所属している。サークルとは大学生が日常的に接する集団の中で、個人の自由な意思に基づいて参加し、そして脱退することのできる集団である。このサークル集団に所属することによって、我々は集団規範を守ることや、周囲の人たちへの礼儀、人間関係の形成または人間関係の問題への対応能力などを習得していると思われる。

また、サークル活動の場所の確保や活動内容は構成員に任されており、自主的に活動を続けていかない限り、サークルは存続できない。サークルの存続、更に発展にあたって、その集団におけるリーダーが果たすべき役割はきわめて重要である。しかし、サークルにおけるリーダーシップ研究はきわめて少ない。

そこで本研究では、早稲田大学のサークルに焦点をあて、幾つかの大学公認かつ規模の大きい（所属人数の多い）サークルにおいて、実際にそのサークルのリーダーがどのようなリーダーシップスタイルを取っているかを分析視点として、明らかにすることを目的とする。

【方法】

本研究では、まずリーダーシップ論の先行研究をもとに、トップダウン型リーダーシップおよび、サーバントリーダーシップの、比較を行い、①明確なビジョンを持っていたかどうか（終着点・目標を見据えて行動していたか）②サークルにおいて個人と集団のどちらを強く意識していたか③フォロワーとのコミュニケーションの取り方、④フォロワーへの責任の持たせ方、⑤フォロワーの成長への貢献度を導き出し、質問項目を作成してインタビューを行った。調査対象は、早稲田大学のスポーツ系サークルの中から早稲田大学公認のスポーツ系サークルで構成員が多く、毎年4月の新入生歓迎会の時期に多くの新入生の人気を獲得している3つのサークルを選んだ。それぞれのサークルにおける幹事長など代表経験者の中から3名を選出しインタビューを行った。

【結果および考察】

トップダウン型リーダーシップとサーバントリーダーシップの二つに大別すると、3者とも基本的には構成員に対して献身的なスタイルをとる後者のサーバントリーダーシップスタイルを採用していることが分かった。また3人の幹事長経験者に共通しているのがサークルの構成員全員がサークルを楽しめるということ

を大前提とし、それに順じてサッカー(大会等)での勝利を目標に掲げていたことである。3者共、フォロワーに対してしっかりと「自主性を尊重している」と語っている。特にフォロワーのサークルへの参加頻度やモチベーションが低下している時の対応はメールや電話などの様々な方法でサークル構成員としても、幹事長としてもコミュニケーションをとろうとしていた。これらの姿勢からはサーバントリーダーシップにおける「傾聴」、「説得」の姿勢が非常に強く感じられた。さらに、A・B氏に共通して見受けられたのが次世代の幹部となる人間には積極的にコミュニケーションを図り、幹部としての仕事をして早いうちから段取りを把握させるなど、サークル運営の事務的な部分で手間取ることのないように成長を促す姿勢を取っていたことである。またA氏についてはサッカーをしないマネージャーにも出来る仕事を任せることでサークルへのコミットメントを高めようともしていた。

【まとめ】

スポーツ系サークルにおける組織を円滑に運営していくための効果的リーダーシップにおいて重要なことはフォロワーからの「信頼」をしっかりと得た上で構成員の主体性を尊重できるような環境を作り出すことであった。

これは前述のサークル特有の性質によるもので、構成員がサークル活動に縛られず、所属サークル以外のやりたいことの合間に気軽にサークルに顔を出すことができ、そしてそこにいる構成員たちと楽しい空間を共有できるということ、さらにそのサークルにコミットし、やりたいことがサークルでの活動に直結している構成員も多数存在するということが必要不可欠である。

本研究によってスポーツ系サークルにおいて効果的なのはサーバントリーダーシップであることが示唆された。しかし、今回の研究ではインタビュー調査対象者が3名と非常に少なく、またインタビューを行ったサークルが行っている種目にも偏りがあったといえる。また質問項目の吟味によっては調査結果が変化して行くことも十分に考えることができる。

今後の課題としてはインタビュー調査対象者の増加、より多くの種目のスポーツ系サークルにもインタビュー調査を行うこと、そして質問項目の吟味等によって、更に詳細かつ明確な結果が導き出されるものと思われる。